

日のみちを月またあゆむ朴の花

藤田湘子

天動説による、格調高い名句である。

太陽が動いた跡を辿るように、月が追いかけてゆつくりと動いて行くのである。作者が、夜、月光に照らし出された白く大きな花を見上げているとも取れるが、私は初夏の午後、まだ明るさの残る青空に浮かぶ月や青葉の緑、樹間に見える九弁の巨花や芳香を想像してしまふ。

水原秋櫻子は、戦後の仮寓を八王子喜雨亭と呼んでいたが、湘子は、横浜緑区の自宅を「朴下亭」と呼ぶほど朴の木や朴の花が好みであった。

『藤田湘子全句集』の季語索引によれば、「朴の花」九句、「朴落葉」十三句が収録されている。また、若葉の傍題として「朴若葉」の二句もある。

1990年（H2作）第九句集『前夜』 鑑賞・轍郁摩